

分類	概要	意見	
懇話会の役割	<ul style="list-style-type: none"> 推進方策への意見提示 	<ul style="list-style-type: none"> 小中一貫教育の基本方針・推進方策に関する履行について教育委員会に意見を述べる事が主旨である。 すでに、小中一貫教育の創造というビジョン(福山市学校教育ビジョンIV)が出来ている。これを素案だと考え、さらに良いものへと肉付けをするなり、具体的な推進の方策を答えることが求められている。 	
小中一貫教育について	<ul style="list-style-type: none"> 小中一貫教育は手段 	<ul style="list-style-type: none"> 小中一貫には、理想のモデルというものはない。すでに県内外で、多様な取組みがなされているが、目的ではなく、あくまでも手だてである。15歳の出口に向かって小中がつながる教育力により、福山市のめざす子ども像を実現させる手だてである。 	
	<ul style="list-style-type: none"> 伸ばしたい力を求める小中一貫教育と、課題解決につながる小中一貫教育の創造 	<ul style="list-style-type: none"> 「福山の子どもたちの良さをどう伸ばすか。」と、「これからの時代に求められている力をどう伸ばすか。」という、伸ばしたい力を求めていく一貫教育と、「福山の子どもたち、福山の学校教育の課題は何か。どう乗り越えるのか」という、課題の解決につながる一貫教育との両面からの小中一貫教育を考えていく必要がある。 	
	<ul style="list-style-type: none"> 地域に合わせた(福山らしい)小中一貫教育の創造 	<ul style="list-style-type: none"> どこにもない、どこも違う福山型の小中一貫教育をどう推進していくかを考える。 「知」「徳」「体」に加えて、「芸(芸術・アート・芸能)」等、何か1つ福山らしいものを取り入れてはどうか。 「都市部」「周辺部」など、地域差がある。それぞれの地域に合わせた独自の内容を考えた小中一貫教育をめざして連携する必要がある。 	
	<ul style="list-style-type: none"> 中学校区の地域コミュニティづくりと家庭や地域の再構築が必要 	<ul style="list-style-type: none"> 小中は義務教育であるということは、地域の教育でもある。中学校区という地域のコミュニティを中心として、学校が拠点となりながら、家庭や地域が一体となって取り組んでいくことが小中一貫教育の理念である。 地域のコミュニティをつくっていく取組みと、家庭や地域を再構築する取組みが同時に進められなければならない。地域コミュニティによる教育の一環としての小中一貫教育という形での検討も必要となる。 	
	<ul style="list-style-type: none"> 小中の相互理解が重要 	<ul style="list-style-type: none"> 小中一貫までの歩みは、まず小中の先生方の「相互理解」から。次に、授業を見合う等の「相互交流」へ。更に、「つながりを考える」ようになり、行事を合同で行うようになる。こうした連携の段階を経て、「カリキュラムをつなげる」ようになり、最後に、「めざす子ども像」という目標をつなぐ一貫へと発展していく。しかし、常に相互理解に戻りながら進めることが大切になる。 	
	<ul style="list-style-type: none"> 小中がつながることによって生まれる教育力 	<ul style="list-style-type: none"> 小中一貫教育で、小中がつながって生まれてくる教育力には、「先生がつながることによって生まれる教育力」がある。小学校で、中学校の先生が跳び箱をポンと跳んで見せたら、子どもたちの目は「あんなに跳ぶんだ」となる。 「子ども同士がつながることによって生まれる教育力」も大きい。インターハイで活躍する選手が子どもたちの前で準備運動をするだけで、「ああなりたいなあ」と思える。中学生が幼児期の子どもたちと接する際、むしろワルと呼ばれていた子どもたちの方が、怒られ経験があるので、上手にきちんとした接し方ができる。 「カリキュラムがつながることによって生まれる教育力」というのもあると思う。 	
	<ul style="list-style-type: none"> 成長保障に大きな成果 	<ul style="list-style-type: none"> 小中一貫教育は、成長保障に関しては相当大きい成果が出てくる。マイナス面はない。問題は、学力保障である。学力保障に関しては成果をあげることは容易なことではない。「実態分析に基づいた指導」「力のある先生が子どもに向き合い良い授業を続ける」「学校・家庭・地域が一体となる」「保・幼・小とつながっていく」「家庭の教育力を高める」等の方法で取り組んでいくことが大事になる。 	
学校の現状	良い所 <ul style="list-style-type: none"> 丁寧なデータ分析 生活面への取組み 	<ul style="list-style-type: none"> 学校は、かなりデータ分析をされている。結構なデータを持たれているように感じる。それぞれの学校では子どもの良さも分かっているし、課題(不登校・家庭環境・学力分散等)も見えている。 不登校問題に、総出席・総欠席・遅刻の数をデータに出して取り組んでいる。その結果、欠席が300程、遅刻が400程減少した。また、登校班による余裕を持った登校が実現し、落ち着きが出てきた。そして、学習面で、ついて来られる児童が増えてきた。すごく相関関係を感じる。 	
	課題	<ul style="list-style-type: none"> 指導が入らない生徒、感動を与えてくれる生徒の混在 引きずる問題行動 	<ul style="list-style-type: none"> 指導が入らない厳しい生徒の実態がある。その背景として、経済的に厳しい家庭の子、特別な配慮を要する生徒が多くなっている。 「体育大会、子どもたちの頑張りに感動した」という声と「逮捕事案」という事実と、その両方が混在している中学校の実態がある。そうした中で、学校現場は日々悪戦苦闘している。 保育所や幼稚園での問題行動を中学校まで引きずっている。
	家庭・地域の現状	良い所 <ul style="list-style-type: none"> 学校への支え 	<ul style="list-style-type: none"> 学校にできることは限度がある。民生委員さんの協力のお陰というのが非常に強い。朝から家庭に対して積極的に取り組んでくれている。今は地域の基盤がしっかりした中での取組みであり、効果が上がっている。

課題	・学力と生活状況との相関関係	<ul style="list-style-type: none"> ・二極化された学力の30%未満側の子どもは、生活困難家庭が多い。 ・C層の子は、生活が不安定な家庭(離婚、夜の仕事等)が多く、朝食を食べてこられない。 	
	・家庭・地域の教育力の低下	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちに求める姿を、親はどう考えているのだろうか。家庭の教育力が低下している。 ・「学校での学び」「家庭での生活」「地域での生活」が、乖離状態ではないか。ばらばらではないか。 ・世相を見ても混迷の時代。不安の時代を乗り切る手だてを、他(外に他者に)に求めるのではなく内(地域)に求めていくような大人社会がまず必要である。 	
	・地域や学校になじめない保護者の増加	<ul style="list-style-type: none"> ・生活保護世帯の保護者は地域や学校になじめないため、PTA活動等がうまくいかない。 ・学習ができる家庭環境にない子どももいる。親を変えることはしんどい。聞く耳を持ってもらえない。子どもにかかわりながら、自分の力でいかに解決していくかを取り組んでいる。 ・「地域との関わりを持たない」「行事に参加しない」「聞く耳を持たない」、個の状態子育てをしている保護者が近年非常に多くなっている。 	
子どもたちに求める資力	<ul style="list-style-type: none"> ・夢や希望 ・自立できる力 ・ねばり強さ、我慢強さ、互いに助け合える力 ・社会で通用するマナー ・人間として大切な力 ・好奇心、目標達成思考、積極性 	<ul style="list-style-type: none"> ・将来社会で自立する生徒を育てていきたい。働くことの意義を早い段階から学んで、夢や希望に向かって今何をしないといけないのかを考えさせたい。 ・親が朝ごはんを用意してくれないのなら、子どもたちが自分で作ったり、用意したりする力をつける取組みをしている。親がしてくれないからできないではだめ。 ・10年後の子どもたちが社会に出て行った時、どんな力を付けたいか。やはり夢や目標を持てる子どもを育てたい。次は、ねばり強くできるとか、我慢できるという力を付けていくこと。もう1つは、困った時は、人に言って抱え込まない、思いを共有して、お互いに助け合える子ども。 ・学校で力を入れているのは、マナー(社会に出て通用する力、挨拶、返事、時間を守る、整理整頓)等を身に付けさせることである。 ・変化の激しい世の中であるが、普遍的な人間として大切なもの(質の高い生活習慣、マナー、キャリア教育と夢・目標等)を身に付けることが必要である。 ・OECDの調査結果、グローバル企業の経営者側・労働者側の両方が求めるものは、「好奇心」「目標達成意欲・思考」「積極性」を持った人材。これらは、世の中に出たときに必要になる栄養・学力だと思う。 	
学校に求めること	指導	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちに持たせたいモチベーション ・「知、徳、体」の育成 ・不登校、問題行動等への小学校段階での指導 	<ul style="list-style-type: none"> ・勉強することによって、「世の中の人のためになる」という社会貢献や、「世の中が変わるかもしれない」という「夢」「志」「希望」を持たせる。「勉強→良い大学→良い企業へ就職→良い生活」という構図は既に崩れている。 ・学校の役割としては、「知、徳、体」の力を育むことは、不易である。 ・不登校の数が中1で急激な増加を見せているが、すでに小3・4で兆候があったのではないか。小学校は担任や保護者が押さえやすい。それが中学校で見え始めているだけかもしれない。問題行動を小学校の早い時期に指導することで中学校段階の課題、3年生の出口の段階の課題を改善するという小中一貫教育も考えられる。
	学力向上	<ul style="list-style-type: none"> ・質の高い生活習慣の定着 ・学習意欲や表現力の育成 ・子どもと向き合った、良い授業の積み上げ ・詳細な分析と取組み 	<ul style="list-style-type: none"> ・学力を向上させるためには、まず、子どもに基本的な生活習慣を身に付けさせることが重要。質の高い生活習慣。例えば、朝食の摂取について、摂取率だけでなく中身が重要である。食パン1枚で、朝食を食べたことにはならない。 ・質の高い生活習慣というのは普遍的なものである。 ・これまで測定されていなかった「学習意欲」や、「表現力」をバランスよく育てていくことが大事になる。 ・学習意欲を小中一貫教育を通して育てることもできる。 ・学力を上げようと思えば、先生が子どもと向き合って良い授業を積み上げて行くしか特効薬がない。 ・学力の調査については、原因も含めて、もう少し詳細に分析を行う必要がある。 ・C層(学習の成立しない層)をどうするか。A層(リーダー)を育てるにはどうしたらいいか。実態に応じて、この両方をきちんと育てていかなければ、学力全体が上がっていかない。 ・C層への指導を生かしながらB層を伸ばし、右肩上がりに変えていく取組みが必要である。
	連携	<ul style="list-style-type: none"> ・家庭、地域との連携 ・小学校と保幼の連携 	<ul style="list-style-type: none"> ・学校は、地域との結びつきをもっと強化する必要がある。地域が見ている子どもの様子や、生活が不安定な家庭・親の状況を、学校が具体的に聞き、課題を把握し、対応を考えたら良い。 ・小中一貫教育推進の土台・基盤づくりとして「保幼との連携」「家庭・地域との連携」が欠かせない。 ・「小1プロブレム」解消について、就学前と小学校の連携の中で改善できるという実感が持てる。今、こういう困ったことがあって、こんな取組みをすすめているというものを、次の学校へつないでいくことが大切である。
	・小中の連携	<ul style="list-style-type: none"> ・どのような教育をしていくかということを連携していく中で、小学校・中学校の発達段階を踏まえて、どのような取組みを行うことが有効かを交流する。 ・小中が連携しておこなう授業研究では、「自分の授業をどう良くしていくか」という視点から、このクラスの子どもの課題の原因を取り除くための仮説に基づいて、「この授業で子どもたちはどう変わっていくのか」「この授業で子どもたちをどう高めていくのか」という視点で授業を参観し、研究する(教育実践研究)というところに質を高めていくことが大切である。 ・それぞれの小学校が持っている子どもの良さや課題(「不登校」「家庭環境」「学力分散」等)を、小学校から中学校へつないでいけば良いと感じる。 	

家庭・地域に求めること	・大人同士の連携		<ul style="list-style-type: none"> ・義務教育の中では、地域の責任も大きい。小さい時から地域が関わって育てていかないといけない。 ・世相を見ても混迷の時代、不安の時代。この改善の手だてを、他(外に他者に)に求めるのではなく内(地域)に求めていくような大人社会がまず必要である。(再掲) ・地域にいる人生のOBが、今の子どもに何を示していくか。この原点に立ち返らないといけない。 ・子ども会活動を通じて、日頃から「絆」「思いやり」「感謝の気持ち」「生きる力」等を養っている。それらの中で、子どもたちを育てる上で地域の連携は不可欠と感じている。
	・先生が授業できる体制のバックアップ		・学力向上に向けて先生がしっかり授業できるという体制を、家庭や地域・教育委員会がバックアップしていくというのが小中一貫である。
行政に求めること	組織・制度・対応	・専門性の活用	<ul style="list-style-type: none"> ・学校だけで対応するのはしんどい。スクールソーシャルワーカーなど、福祉行政とつなげながらの取組みが重要である。 ・スクールカウンセラーでは不十分。専門性のあるスクールソーシャルワーカーを増やして、地域と連携をしていく必要がある。
		・先生が授業できる体制づくりのバックアップ	・学力向上に向けて先生がしっかり授業できるという体制を、家庭や地域・教育委員会がバックアップしていくというのが小中一貫である。(再掲)
		・小中一貫教育推進のポイントや方向性の提示	・小中一貫教育を進める際に抜かしてはいけないポイントや方向性を示して欲しい。
		・選べる中学校は、いかがなものか	・選べる中学校というのが始まっている。子どもは、友だちが多くいる学区内の中学校へ行ききたがるが、荒れた中学校へは行かせたくないという保護者の考えから他校区に進学しているという話を聞いた。選べる中学校というのは、いかがなものかという気がする。
	・家庭への毅然とした対応	・普段、PTAでは話ができないような家庭があるが、行政なども含めて逃げずに対応をしなければ、学校が荒れてしまい、結果、先生も両親も大変な後始末をしなければならなくなる。	
	分析	・学力調査の詳細な分析	<ul style="list-style-type: none"> ・広島県「基礎・基本」定着状況調査の結果を、県と比べてみる視点も大事だが、広島市や福山市などの大都市圏は、点数が飛躍的に伸びるということはない。福山の中での子どもたちの分布という分析はあるのか。8割以上のA層から3割未満のD層までの分布が重要。例えばD層が多いのであれば、そこをどうするかを考える。 ・学力の調査については、原因も含めて、もう少し詳細に分析を行う必要がある。(再掲)
・福山の子ども達の良さの分析		・福山市の子どもの現状や課題が示されていましたが、福山の子どもたちの「良さ」というデータはないか。課題からは、なかなか前に向かっての希望が見えて来ない。例えば、福山は多様な博物館を持っているため、生涯学習施設の活用率が高いなどが考えられる。	